

「真理とは？」

エペソ人への手紙 6 : 13 - 17

March.15.2026

エペソ人への手紙 6 : 13 - 17 (パウロ)

Preface

先週から、悪魔の策略に対して堅く立ち、もろもろの悪霊に対する格闘をするために身に着ける神の武具について学び始めました。

先ず、神の武具を取るにあたって真っ先にしなければならない基礎・土台、人間の体でいう腹筋のような部分にあたるのが、腰に真理の帯を締めること、それ即ち、「イエス・キリストの現れの時に与えられる恵みをひたすらに待ち望むことであり、主イエス様の再臨を待ち望まずして私たちの腰に真理の帯を締めるということにはならない」ということを確認いたしました。

イエス様が再び来られることによってすべてが終わり、すべてが整い、すべてが完成し、すべてが新しく始まるという福音の核になることを基礎・土台として初めて、私たちは神の武具を身に着けて、戦うべき霊的戦いを戦えるということです。

今朝は、先週分かち合いましたこの内容にもう少し補足しながら考えて行きたいと思っております。

何について補足したいのかと言いますと、「そもそも、聖書の言う真理とは何なのか？」ということです。

Part One

真理という言葉は、専売特許のように聖書だけで用いられている言葉ではなく、世間一般でも使われている言葉かと思えます。

「本物」とか、「真実」とか、「事実」とか、「変わる事のない本当のこと」というような意味合いで使われているように思えます。

辞書で調べてみますと、「いつどんなときにも変わる事のない正しい物事の筋道。真実の道理」と出ていました。

つまり、「揺るぐ事のない事実」ということでしょう。

実際、聖書の「真理」と訳されている言葉「アレセイア」というギリシャ語は、英語で言うところの「real, reality」にあたる、「事実」とか「現実」と訳した方が、より正確と言いましょうか、より身近に感じる生々しい意味合いの言葉になるかと思えます。

日本語の「真理」という言葉は、何かこう上品と言いましょうか、ベールに包まれたちょっと手の届かない、私たちの身近ではない、いささかカッコつけた表現のように思えてしまいます。

ですので、私は以前から個人的に、聖書の「真理」と訳されている言葉をより身近に感じるために、「事実」とか、「現実」と訳しても良いんじゃないかなと思っておりました。

例えば、ヨハネの福音書14：6の「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」というあのイエス様のお言葉を、「わたしが道であり、**事実であり、現実であり**、いのちなのです」と訳しますと、「イエス様というお方は**事実なるお方**で、イエス様というお方を知ることが**現実を知る**ことである」という意味合いがより明確になるような気が致します。

逆に、「イエス様を知らないということはあらゆる物事の**事実を否定**していることになり、イエス様を受け入れないことは**現実を直視**していない、**現実を直視**できていないことになる」というようなメッセージも同時に浮き彫りになり、もっとう身に迫って来るような感じが致します。

皆さんは、いかがでしょうか？

さらに、ヨハネの福音書8：32の「あなたがたは**真理**を知り、真理はあなたがたを自由にします」という言葉も、「あなたがたは**事実**を知り、**現実**を知り、**事実・現実**はあなたがたを自由にします」と訳すならば、「私たちが自由を求めてもがいているのは、**事実**を知らず、**現実**を知っていないからである。神という**事実**を、イエス・キリストという**現実なるお方**を知らないから、知ろうとしないから、その**事実・現実**を受け入れていないから物事の本質が見えなくなり、見えないからもがくしかない私たち人間、この社会になっている」という真に迫るようなメッセージ性を帯びて来るのではないかなあと思うのです。

またこれは、私の個人的な見解になりますが、ギリシャ語のアレセイアという言葉も、「**事実・現実**」と訳していないことによる勘違いと言いましょか、見当違いしているような一つの具体的な聖書の御言葉の使われ方が、国会図書館の理念のように掲げられている「**真理**がわれらを自由にする」という言葉かなと思います。

国会図書館に掲げられている「**真理**がわれらを自由にする」という言葉は、確かにヨハネの福音書8：32からの引用ですが、問題は、この「**真理**」という言葉が、イエス・キリストのことを指し示して使われているようではないということです。

「**真理**」という言葉は、先ほど言いましたように、奥まったところにあると言いましょか、ベールに包まれたような、抽象的な、手の届きにくいちょっと高貴で崇高なイメージを持つ言葉のように感じてしまうところがあるせいか、国会図書館で使われている「**真理**がわれらを自由にする」という言葉に込めているその意味合いも何となく抽象的なもののように感じます。

「本をたくさん読んで、それまで知ることが出来なかった知識を手に入れ、知識を身に着け、知識を身に纏えば、**真理**という境地に至ることが出来、知識

の積み重ねによって至った真理なるものは、私たちに自由にしてくれる」というようなことなのかなと思います。

でも、聖書ははっきりと言います。

「主なる神様を恐れることが知識の初めである。愚か者は、主を恐れることを選ばず、主を恐れるという知識を憎む」（箴言 1 : 7, 29）とです。

つまり、「真理とは、神がおられるという事実であり、神なくして真理を語ることは出来ないし、どんなに人の書いた本を読んで知識を蓄えたところで真理に至ることも出来ない。もし、神なき知識をもって真理に至ろうとするならば、それは幻影であり、砂の上に建てた家のようにでしかなく、いつかは消えて無くなり、最終的にはイエス・キリストの再臨の時、今ある天地が消え去る時、跡形もなくなる」ということです。

「イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みをひたすらに待ち望むという現実を、事実を見据えないことは、物事全てに表れる根本的事実を否定することであり、現実を直視せず、実存的現実を生きることにはならない」ということなんだと思います。

聖書で「真理」と訳されているギリシャ語のアレセイアという言葉は、「ア」という否定を意味する接頭語に、「レセー」という「隠蔽、隠すこと」を意味する言葉がくっついて出来た言葉です。

即ち、不隠蔽性、隠れているものが明るみにされた、隠されていない状態になったという意味で、ベールになんかに包まれてもおらず、手の届かない奥まったところに隠されているわけでもなく抽象的でもない、誰にとっても事実であり、誰にとっても現実であるという意味合いの言葉です。

つまり、イエス・キリストを知らない・受け入れないということは、物事の根本的な事実を否定することであり、神がこの世界をお造りになったという現実から逃避することであり、主イエスが神であられるという事実を直視せず、神の恵みゆえに生かされているという現実から目を背けていることになるということです。

エレミヤ書に、「天にも地にも、わたしは満ちているではないか」（エレミヤ 23 : 24）という主なる神様の言葉がありますが、正にこの御言葉の通り、真理なる神は事実なるお方であり、現実なるお方です。

Part Two

そして、もっと由々しき事態と言いましょうか、深刻なのは、この事実を、悪魔は知っているということです。

マルコの福音書 1 : 23 - 26 (パワポ)

汚れた霊は、イエス様が神の聖者であられることを知っていました。

マルコの福音書 1 : 3 4 (パウロ)

悪霊どもは、イエス様のことを知っていました。

イエス様がどんなお方なのかを知っていました。

イエス様が人の姿を取って来られた神であられることを知っていました。

イエス様こそが、天と地にあるすべてのものをお造りになられた神のかたちなるお方で、万物に先立って存在しておられる方だということを知っていました。

マルコの福音書 3 : 1 1 (パウロ)

人は、イエス様を見てもひれ伏そうとは思いませんでしたが、汚れた霊どもは、「あなたは神の子です」と、その御前にひれ伏さずにはいられませんでした。

マルコの福音書 5 : 2 - 8 (パウロ)

被造物の中で唯一神のかたちに造られ、神の愛の目当てである人を、霊的足かせ霊的手かせ霊的鎖をもって人を縛り付け、霊肉ともに傷つけ、自由とは真逆の状態に留まらせておこうとする汚れた霊どもは、主イエス・キリストが誰なのかを知っていました。

主イエス様が、どんなお方なのかを知っているがために、走って来て拝さずにはいられませんでした。

主イエス様がいと高き神の子であることを、汚れた霊どもは知っていました。

ところが、奴らが知っているこの大切な事実を、人間たちには知らせないように隠し、分からないように隠蔽し、知ろうとする心をもみ消し、神をなき者と見なさせようとしていることを、イエス様がこのように指摘しています。

ヨハネの福音書 8 : 4 3 - 4 6 (パウロ)

4 5 節で、イエス様、変な話し方をされます。

「しかし、このわたしは真理を話しているので、あなたがたはわたしを信じません。」

真理を事実を話せば、真理であり事実であるわけですから、当然信じて然るべきなのですが、なぜだか人は、真理を、事実を、イエス・キリストという現実なるお方について話しても、信じようとしません。

なぜか？

悪魔ゆえにです。

悪魔は、主イエス様が父なる神のもとから来られたことを知っていますし、父なる神が、主イエス様をこの地に、私たち人の救いのためにお遣わしになったことを知っています。

でも奴らは、その知っている事実、真理に立っていません。

44節で、「悪魔は初めから人殺しで、真理に立っていません」とイエス様仰っている通りです。

どんなに知っていても、その知っていることに立とうとしていないならば、その知っている事実を基礎としないならば、土台としないならば、腰に帯として締めようとしていないならば、それは、主イエス・キリストが神であられるという現実を直視していない、つまり、奴らの内には真理が無いということです。

そして、「そんな真理のない者たち、悪魔の策略にハマっていることにも気付いていない人は、知ってか知らずか、自然といつの間にか、その悪魔を父としているんだ」とイエス様仰います。

生まれながらに神の御怒りを受けるべき子らとして生まれてきた、この世の流れを作り上げている空中の権威を持つ支配者である汚れた霊に従って歩んで来た私たち罪人は、イエス様の言っている言葉が分からなくなっていました。

イエス様が、真理を、事実を、現実を話しておられるにもかかわらず、悪魔の事実を認めようとしていない習性にまんまと染められ、その事実、現実、真理そのものであられるイエス様を信じようとしていないのです。

もっと滑稽な姿を露わにしているのが、48節からです。

ヨハネの福音書8：48－52（パワポ）

「あなたが悪霊につかれていることが、今分かった。」

あべこべに、ユダヤ人たちが、神の民だと自負しているユダヤ人たちがイエス様に対して、「あなたこそ悪霊につかれています、現実が見えていない。頭がおかしくなって、事実を事実として認めることの出来なくなっている」と、自分たちの方こそ真理が分かっており、事実を認め、現実、即した生き方が出来ていると、まんまと悪魔の手中に収まっている事実を分かっています。

真理であられる方に対して、「悪霊につかれています」と堂々と言い放つのです。

なんと滑稽な姿でしょうか。

霊的に何も見えず、何もわかっていないことを恥ずかしがるどころか、むしろ胸を張って誇るかのように、自分たちの霊的無知を、知識のなさを、神を恐れることが知識の初めであるという事実を知らないということを誇らしげにも見せびらしているようです。

イエス様が十字架に架けられる前には、時の権力者であり、イエス様を十字架に架けることを決めたピラトも、「わたしは、真理について証しするために生まれ、そのために世に来ました」と仰る真理であられるイエス様を目の前に

して、「真理とは何なのか」と、イエス様を拝さずにはいられない、その御前に跪かずにはいられない悪霊以下の態度しかとることが出来ませんでした。

これが、イエス・キリストという真理なるお方を、事実なるお方を、現実であられるお方を知らない、見ようとしない、私たち罪人・人間の姿です。

これが、私たち、悪い者・サタンの支配下にあるこの世を生きる者たちの姿です。

なのに、今こうしてイエス・キリストを礼拝するために、この場にいることが出来ている。

しかも、サタンのようにではなく、神の子として、神の民として、神の愛を受けていることを知る者として主イエスをほめたたえ、主イエスを待ち望み、主イエスの愛に生き、主イエスの愛をもって人を愛したいと思えていることが、どれだけ大きな奇跡であることか分かりません。

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです」(Iヨハネ4：10)という愛ゆえに、イエス・キリストが真理であり、事実であり、現実であると分かっている、理解出来ている、知っている、これ以上の知識はないと感謝をもって覚えることが出来ている。

これ以上の奇跡は、私たち人間に存在しません。

イエス・キリストを信じる者とされた者たちは、この神の奇跡に入れられた者たちです。

だから腰に真理の帯を締めて、イエス・キリストが再び現れるその時に与えられる恵みをひたすらに待ち望むという事実を、現実を、真理を生きるのです。人の作った空想や妄想や作り話ではありません。

真理とは、イエス・キリストです。

真理とは事実であり、現実であり、イエス・キリストこそ万物の事実であり、万物のすべてです。

イエス・キリストを知るとは、万物を知ったことであり、イエス・キリストを知らないとは、何も知らないことと同じことになってしまいます。

Part Three

ここ5年ぐらいでしょうか、我が家では、子どもたちの受験が続きました。

つい最近も、次男の高校受験がありました。

「何で高校に行かなくちゃいけないの？」と聞かれた時に、「いや別に高校に行きたくなければいかななくてもいいよ。お前がちゃんと神様の導きの中で、イエス様を信じながら生きられる道が違うところにあるんだと思うなら行かなくてもいいよ」と答えましたが、結局、高校受験することを本人が決めて受験しました。

そんな子どもの姿を通して、私自身の中学受験から大学受験に至るまでに思っていたこと、感じていたことを思い返しました。

学校の勉強も、受験のための勉強も、神様のお与え下さる一般恩恵という領域の中で考えるならば大いに学ぶべきこともあると思いますし、ためになることも沢山あるとは思いますが、そこには真理がありません。

小学生の頃から、あたかもそこに真理があるかのように語られ、教えられ、思ってきたけれども、そこには真理がないということを、大学生になった頃、何となく気付かされたような気が致しました。

国語、数学、英語、社会、理科という大学に入るために必要な科目を出来る限り一生懸命に勉強し大学に入れば、真理という言葉では言い表しはしないものの、真理のような、つまり、「人は何で生きるのか？ 人はどこから来たのか？ 人は何のために生きるのか？ この世は一体全体何なのか？ 状況が変わり、場所が変わり、人が変わっても残り続けるもの、変わらず根本的な影響を与え続けることが出来るのは何なのか？」というようなことを教え、解いてくれる所。

また、大学の先生は、それまでの受験のための勉強のようなものを教えて下さるのではなく、「いのちとは何なのか？ 道とは何なのか？ 真理とは何なのか？」というようなことを指し示してくれる特別な知識人だと思っていたように思います。

また、研究という世界、研究という領域、研究という道、研究という森に足を踏み入れて突き進んで行くならば、何か本物と言えるような何かに辿り着けるものだと思っていました。

ところが、大学に入って呆気にとられると言いましょいか、肩透かしにあつたと言いましょいか、夢から醒めたような思いがしたのは、教えて下さる先生方も普通の人間だったということです。

すみません。

悪口を言っているのではなく、高校までの先生方や世間一般で生活している普通の人たちと同じように普通の人で、真理を指し示してはくれない、真理が何なのかをサクッととは言えない、真理なるものがまだ見つからない、そのことにおいて同じように迷い、悩んでおられる普通の方々であることを感じました。

その学んでおられる、または研究しておられる、従事しておられる分野においての特定のスペシャリストで、この産業世界において何かの役に立っていることをなさっておられるある意味すごい方々ではあるとは思いましたが、それが真理、つまり、どんなものに対しても、何ごとにおいても変わることはない、揺るぐことのない、揺れることもない、すべてを見通し、すべての土台で、すべてがそこに通ずるようなものではないということを何となく感じてしまったように思います。

同じように分からず、同じように迷い、同じように悩んでいる人なんだと思

えてしまいました。

そして行き着くところ、結局、そのなさっていることがどんな利益を生むのか、どんな経済的効果をあげるのかということに繋がらないと、残ることも、残されることも難しいものなんだと感じてしまいました。

そこでなされていることは、科学という一物差しに過ぎず、あたかもその物差しを用いればすべてを推し測ることが出来るかのように刷り込まれているけれども、それが真理に通ずるものではないということ、感覚的に何となく感じてしまったような気が致しました。

そしてクリスチャンとなり、神を知り、神の言葉である聖書を読みましたら、イエス様の言葉に出会いました。

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません」(ヨハネ14:6)という言葉です。

その言葉に出会った時、「ああ、僕はこれまで、僕なりの道を、僕なりの真理を、僕なりのいのちを探し求めていたけれども、そのどれもが道でもなく、真理でもなく、いのちでもなかった。父なる神のみもとに行くことなくして、道もなく、真理もなく、いのちもないし、イエス様抜きに、道も、真理も、いのちも語る事が出来ないんだ。この世の中、このイエス様の言葉が無視され、なおざりにされ、いやむしろ、反感をもって反発しながら、自分たちなりの真理と道といのちを探し求めようともがいてはいるものの、当然のように見つかっていなんだ」ということが、事実として分かったように思えたと言いましょか、迫ってきました。

本物が神がおられ、イエス様が神であり、本物の神がいらっしゃる、霊であられる神が私の内に住んで下さるという、私の努力や精進等が入る余地なんか一切なく、ただただ神の恵みによって、私の身に起こったことが驚愕でしかありませんでした。

イエス様が真理であられ、道であられ、いのちであられることを抜きにして、そこには何もないということが分かったと思えることが、どんな言葉をもってしても言い表すことの出来ない恵みであり、奇跡であり、事実であるんだということが実感出来てしまいました。

「そんな主観的な宗教体験をもって『真理だ』なんて言うから、科学という客観的な物差しが必要なんだよ」と世は言うかもしれませんが、実のところ、その科学という手法も、大いに人間側の主観的思い込みによる一つの物差しでしかないということ、聖書は語り続けているように思います。

すみません。

科学というものを批判しようとしているのではなく、その貢献、素晴らしさ、神の一般恩恵という視点から考えた時の恵みは、もちろん多大なものかと思

ますが、その限界を認め、自然を超えた超自然的な世界、超自然的物事、超自然のお方を推し測ることは出来ない、それが真理には成り得ないということを素直に、率直に、正直に認められたらなんと幸いな、神の言葉に立脚した科学になれるんじゃないかなあと思っているだけです。

Conclusion

最後に、第二コリント 10 章の御言葉を読んで終えたいと思います。

コリント人への手紙第二 10 : 3 - 5 (パウロ)

イエス・キリスト、その方と出会い、その方と手を繋ぎ、その方と一つになること、これがいのちであり、道であり、真理です。

言葉遊びではなく、虚構でなく、雰囲気でもなく、いい思想でもありません。実際に存在しておられるという問題であり、この方との関係がどうなのかが問題であり、約束ゆえに招かれている天の御国・神の国に関する問題であります。

私たちは、イエス・キリストを決して手放してはなりません。

お祈りいたします。

祝祷：第二コリント 9 : 5